

意外と知らない『吾輩は猫である』

有名な『吾輩は猫である』ですが、漱石自身は、当初、この小説の題名としてもう一つ別の案も考えていました。さて、それはどんな題名だったのでしょうか？

【クイズ①】

○『吾輩は猫である』が生まれるまでの漱石

- ・慶応 三（一八六七）年…江戸（現在の東京都）に、五男三女の末子として生まれ、金之助と名付けられる。夏目家は代々名主を務めていた。
- ・明治一七（一八八四）年…東京大学予備門に入学。
- ・明治一九（一八八六）年…東京大学予備門が第一高等学校に改称。進級試験の際に腹膜炎になり、落第。この落第が転機となり、その後卒業まで主席を維持した。
- ・明治二二（一八八九）年…同級の正岡子規と親しくなる。子規の影響で漢詩を作り、初めて「漱石」の号を用いた。
- ・明治二三（一八九〇）年…帝国大学文科英文学科に入学。
- ・明治二五（一八九二）年…夏、帰省中の子規を松山に訪ね、高浜虚子と会う。
- ・明治二六（一八九三）年…帝国大学文科英文学科を卒業。高等師範学校に英語教師として着任。
- ・明治二八（一八九五）年…愛媛県尋常中学校（松山中学）に英語教師として赴任。子規とともに本格的に俳句を始める。
- ・明治二九（一八九六）年…熊本第五高等学校に赴任。前年に見合した中根鏡子と結婚。
- ・明治三三（一九〇〇）年…五月、文部省から英国留学の辞令が下った。九月、英国へ出発。一〇月、ロンドン着。
- ・明治三四（一九〇一）年…英文学の研究に励むが、本代にも足りない留学費、異国での孤独、文化的違和感などから、次第に神経衰弱になる。
- ・明治三五（一九〇二）年…根を詰めた勉強により、強度の神経衰弱に悩まされ、漱石発狂の噂が日本に伝わる。一〇月、文部省から帰国を促す電報が届く。一二月、帰国の途についたが、その直前に子規の訃報をきく。
- ・明治三六（一九〇三）年…一月、帰国。妻子と東京に住む。第一高等学校講師と東京帝国大学文科大学講師に就任。六月頃から神経衰弱が強まるとともに、妻とも不和となり、妻子を実家に帰して別居。
- ・明治三七（一九〇四）年…一二月、俳句雑誌「ホトトギス」同人たちの文章会（山会）で、「吾輩は猫である」（後の『吾輩は猫である』の「二」）を朗読。好評を得て「ホトトギス」新年号への掲載が決まる。
- ・明治三八（一九〇五）年…一月、「吾輩は猫である」を「ホトトギス」に発表。好評のため、続編を次々と「ホトトギス」に掲載（二月、翌年八月）。一〇月、『吾輩は猫である』上篇を刊行。
- ・明治三九（一九〇六）年…一二月、『吾輩は猫である』中篇を刊行。
- ・明治四〇（一九〇七）年…五月、『吾輩は猫である』下篇を刊行。



◀『吾輩は猫である』上編（明治三八年）

○高浜虚子の回想記「漱石氏と私」（大正六年）

私はある時文章も作ってみてはどうかということをお勧めしてみた。遂に来る十二月の何日に根岸の子規旧慮で山会をやることになっているのだから、それまでに何か書いてみてはどうか、その行きがけにあなたの宅へ立寄るからということをお約束した。当日、出来て居るかどうかをあやぶみながら私は出掛けて見た。漱石氏は愉快そうな顔をして私を迎えて、一つ出来たからすぐここで読んで見てくれとのことであった。（中略）氏の要求するままに私はそれを朗読した。（中略）とにかく面白かったので大いに推賞した。（中略）漱石氏が行った時には原稿紙の書き出しを三、四行明けたままにしておいて、まだ名はつけていなかった。名前は「猫伝」としようか、それとも書き出しの第一句である「吾輩は猫である」をそのまま用いようかと思つて決しかねているとの事であった。私は「吾輩は猫である」の方に賛成した。（「吾輩は猫である」は文章会員一同に、「とにかく変わっている。」という点に於いて讃辞を呈せしめた。そうして明治三十八年一月発行の『ホトトギス』の巻頭に載せた。この一編が忽ち漱石氏の名を文壇に噴き散らした事は世人の記憶に新たなる所である。（中略）はじめ「猫」は一回で結末にしてもよく、続きを書こうと思えば書けぬこともないと話していたが、評判が善かったので続いて筆を取るようになった。

【クイズ②】

この小説は、自分のことを「吾輩」と呼ぶ猫が語り手となっていますが、この「吾輩」が、生まれて初めて見た人間は、どんな人だったのでしょうか？

- 「A 教師 B 学生 C 若い娘」

○『吾輩は猫である』の内容

中学校の英語教師・珍野苦沙弥の家に飼われている「猫」が語り手となり、「吾輩」（猫自身）の視点から、珍野一家や、そこに集う彼の友人、門下の書生たちなど、社会の様子を風刺的に語る。

○『吾輩は猫である』「二」（冒頭部分）

吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生まれたかとも見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番癡悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕まえて煮て食うという話である。しかしその当時は何とも考えもなかったから別段恐ろしいとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものを見始めてであろう。

（この後、「吾輩」は、苦沙弥先生の家で飼われることとなる。）

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書齋に這入ったがりほとんど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思つている。当人も勉強家であるかのごとく見せている。しかし実際はうちのものがいうような勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく昼寝をしている事がある。時々読みかけてある本の上に涎をたらしている。（中略）吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というものは実に楽なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。それでも主人に云わせると教師ほどつらいものはないそうで彼は友達が来る度に何とかかんとか不平を鳴らしている。

【クイズ③】

「吾輩」は近所の「三毛子」という猫に恋(?)をしますが、この「三毛子」は、どんな人に飼われていたでしょうか?

- 「A 金持ちの娘 B 苦沙弥先生の姪 C 琴の師匠」

○『吾輩は猫である』「二」

新道の二絃琴の御師匠さんの所の三毛子でも訪問しようと思つた。三毛子はこの近辺で有名な美貌家である。吾輩は猫には相違ないが物の情けは一通り心得ている。うちで主人の苦い顔を見たり、御三(二女中の名前)の険突を食つて気分が勝れん時は必ずこの異性の朋友の許を訪問していろいろな話をする。すると、いつの間にか心が晴々して今までの心配も苦勞も何もかも忘れて、生れ変わったような心持になる。女性の影響というものは実に莫大なものだ。杉垣の隙から、いるかなと思つて見渡すと、三毛子は正月だから首輪の新しいのをして行儀よく椽側に坐っている。その背中の丸さ加減が言うに言われんほど美しい。曲線の美を尽している。尻尾の曲がり加減、足の折り具合、物憂げに耳をちよいちよい振る景色なども到底形容が出来ん。(中略)吾輩はしばらく恍惚として眺めていたが、やがて我に帰ると同時に、低い声で「三毛子さん三毛子さん」といいながら前足で招いた。三毛子は「あら先生」と椽を下りる。赤い首輪につけた鈴がちやらちやらと鳴る。お正月になつたら鈴までつけたな、どうもいい音だと感心している間に、吾輩の傍に来て「あら先生、おめでどう」と尾を左へ振る。吾輩猫属間で御互に挨拶をするときには尾を棒のごとく立てて、それを左りへぐるりと廻すのである。町内で吾輩を先生と呼んでくれるのはこの三毛子ばかりである。

【クイズ④】

苦沙弥先生の家に、ある時泥棒が入ります。さて、この泥棒は何を盗んでいったのでしょうか?

- 「A 金庫に入っていた現金 B 苦沙弥先生の執筆した原稿 C 教え子からもらった山の芋」

○『吾輩は猫である』「五」

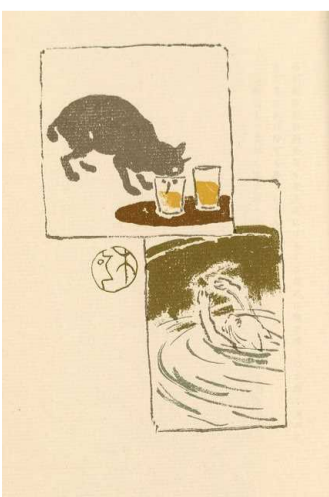
もう何時だろうと室の中を見廻すと四隣はしんとしてただ聞えるものは柱時計と細君のいびきと遠方で下女の齒軋りをする音のみである。(中略)台所の雨戸にトントンと二返ばかり軽く中つた者がある。はてな今頃人の来るはずがない。(中略)今度はギーンと雨戸を下から上へ持ち上げる音がする、同時に腰障子を出るだけ緩やかに、溝に添うて滑らせる。いよいよ鼠ではない。人間だ。(中略)御高名だけはおねて承けたまわっている泥棒陰士ではないか知らん。(中略)細君の枕元には四寸角の一尺五六寸ばかりの釘付けにした箱が大事そうに置いてある。これは肥前の国は唐津の住人多々良三平君が先日帰省した時御土産に持って来た山の芋である。山の芋を枕元へ飾つて寝るのはあまり例のない話ではあるがこの細君は煮物に使う三盆を用筆筒へ入れるくらい場所の適不適と云う觀念に乏しい女であるから、細君にとれば、山の芋は愚か、沢庵が寢室に在つても平気かも知れん。しかし神ならぬ陰士はそんな女と知ろうはずがない。かくまで鄭重に肌身に近く置いてある以上は大切な品物であろうと鑑定するのも無理はない。陰士はちよつと山の芋の箱を上げて見たがその重さが陰士の予期と合して大分目方が懸りそうなのでさぶる満足の体である。いよいよ山の芋を盗むなと思つたら、(中略)急におかしくなつた。

【クイズ⑤】

この小説は最後、どんな場面で終わるでしょうか?

○『吾輩は猫である』「十一」(末尾部分)

死ぬのが万物の定業で、生きていてもあんまり役に立たないなら、早く死ぬだけが賢いかも知れない。諸先生の説に従えば人間の運命は自殺に帰するそうだ。油断すると猫もそんな窮屈な世に生まれなくてはならなくなる。恐るべき事だ。何だか気がくさくさして来た。三平君のビールでも飲んでちと景氣をつけてやる。(中略)三平などはあれを飲んでから、真赤になって、熱苦しい息遣いをした。猫だつて飲めば陽気にならん事もあるまい。どうせいつ死ぬか知れぬ命だ。何でも命のあるうちにしておく事だ。死んでからああ残念だと墓場の影から悔やんでもおつつかない。(中略)吾輩は我慢に我慢を重ねて、ようやく一杯のビールを飲み干した時、妙な現象が起こつた。始めは舌がびりびりして、口中が外部から圧迫されるように苦しかったのが、飲むに従つてようやく楽になつて、一杯目を片付ける時分には別段骨も折れなくなった。もう大丈夫と二杯目は難なくやつけた。(中略)陶然とはこんな事を言うのだからと思ひながら、あてもなく、そこかしこ散歩するような、しないような心持ちでしまりのない足をいい加減に運ばせてゆくと、何だかしきりに眠い。寝ているのだから、あるいているのだから判然しない。眼はあけるつもりだが重い事夥しい。こうなればそれまでだ。海だろが、山だろが驚ろかないんだと、前足をぐにやりと前へ出したと思ふ途端ぼちゃんと言つて、はつと言つて、——やられた。どうやられたのか考へる間がない。ただやられたなと気がつくか、つかないのにあとは滅茶苦茶になつてしまつた。(中略)水から縁までは四寸余もある。足をのばしても届かない。飛び上がったも出られない。呑気にしていれば沈むばかりだ。もがけばがりがりと甕に爪があたるのみで、あつた時は、少し浮く気味だが、すべればたちまちぐつともぐる。もぐれば苦しいから、すぐがりがりをやる。(中略)その時苦しいながら、こう考へた。こんな呵責に逢うのはつまり甕から上へあがりたばかりの願である。あがりたいたいのは山々であるが上がれないのは知れ切っている。吾輩の足は三寸に足らぬ。よし水の面からだが浮いて、浮いた所から思ふ存分前足をのばしたつて五寸にあまる甕の縁に爪のかりようがない。甕のふちに爪のかりようがなければいくらも掻いても、あせつても、百年の間身を粉にしても出られっこない。出られないと分り切つているものを出ようとするのは無理だ。無理を通そうとするから苦しいのだ。つまらない。自ら求めて苦しんで、自ら好んで拷問に罹つているのは馬鹿気である。／「もうよそう。勝手にするがいい。がりがりはこれぎりご免蒙るよ」と、前足も、後足も、頭も尾も自然の力に任せて抵抗しない事にした。／次第に楽になつてくる。苦しいのだからあがりたいたいのだから見当がつかない。水の中にいるのか、座敷の上にいるのだから、判然しない。どこにどうしていても差し支えはない。ただ楽である。否、楽そのものすらも感じ得ない。日月を切り落とし、天地を粉塵して不可思議の太平に入る。吾輩は死ぬ。死んでこの太平を得る。太平は死ななければ得られぬ。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。ありがたいありがたい。



▶『吾輩は猫である』下篇(明治四〇年)挿絵